

「他者と出会う」というケアの地平へ  
— 町田そのこ『52ヘルツのクジラたち』をめぐって —

大関 健一，青柳 宏

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第73号 別刷

2023年3月



# 「他者と出会う」というケアの地平へ — 町田そのこ『52ヘルツのクジラたち』をめぐって —

To the horizon of care that "meets others"  
—About Sonoko Machida's "52 Hertz no kujiratachi"—

大関 健一<sup>†</sup>, 青柳 宏<sup>‡</sup>  
OZEKI Kenichi, AOYAGI Hiroshi

## 概要 (Summary)

子どもたちは「傷つきやすさ」をもっている。「傷つきやすさ」とは、子どものもつ感受性である。そのゆたかな感受性は、子どもたち自身の生を彩りゆたかなものにしてくれる。また、それは子どもの心の成長に欠かすことのできない大切なものである。一方、私たち大人は、時に社会の中で、〈ひと〉として生きるために〈ひと〉に縛られ、自らの作り上げた「意味」に囚われ生きる。自己に執着し、本当の意味で「他者と出会う」ことができず、孤独に苦しむ人々も少なくない。子どもたちは、そんな私たちの「苦しみ」さえも感受してしまふ。子どもたちのもつゆたかな感受性によって。

本稿は、町田そのこ『52ヘルツのクジラたち』をとおして、私たち人間が抱える普遍的な「苦しみ」と、それをケアする子どもたちの感受性について考える。そこに見えてきたものは、子どものもつ「傷つきやすさ」、意識を越えて他者の痛みを自らの内に宿すという在りかた、それによって開かれる「意味」の世界以前の世界、「他者と出会う」というケアの地平だった<sup>1</sup>。

キーワード：傷つきやすさ、感受性、身代わり、意味、普遍的な苦しみ、ケア、他者と出会う

## 1. はじめにかえて

まず、はじめに『子どもたちが語る登校拒否——402人のメッセージ』から、学校に登校しないことを選んだ古川明香さん(11歳)が綴った詩を引用したい。

うれしかった

先生と 勉強した、／保健室にいて、／初めてだ、／先生の手／しなやかそう、／わたしの父さんの手、／ゴツゴツしているよ、／先生と、／勉強した、／ああ、今日、／学校行ってよかったな、

(石川・内田・山下,1993:p.162.)

保健室で初めて先生と勉強したときの気持ちを「うれしかった」という率直な題名で綴る古川さん。身近な父親の手と比べながら、先生の手を見つめる。「先生の手／しなやかそう」という言葉に、古

<sup>†</sup> 栃木県教育委員会 芳賀教育事務所 学校支援課

<sup>‡</sup> 宇都宮大学大学院教育学研究科 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: aoyagi@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

川さんの先生に対する親しみの気持ちが感じられる。「先生と 勉強した、」に始まり「先生と、／勉強した、」と一つ一つの事実を思い出し、確かめるかのように繰り返される言葉に、先生との勉強は古川さんにとって大切な出来事であったことが読み取れる。「ああ、今日、／学校に行ってよかったな、」教師として、そう思ってもらえることほど、うれしいことはないだろう。古川さんは、苦しさを抱きながらも、先生という「他者」を感受している。そして同時に喜びを感じている。

一方、このとき教師は、古川さんから何を感じ、何を受け取っているのだろうか。学校や家庭における教育に目を向けたとき、そのまなざしは自然のうちに「大人から子どもへ」どのような影響を与えられているかという意識を帯びる。しかし、人は絶えず、他者からの影響を受けながら生きる。教師も例外ではない。感受性ゆたかに先生という「他者」と向き合う目の前の子どもに、教師自身も（意識するかしないかは別として）絶えず影響を受け続けている。学校や家庭などにおいて、子どもたちと過ごしたことのある人であれば、「子どもから大人へ」の影響を感じたり、子どもと接することで自らが変わっていくという感覚をもったりしたことがあるのではないだろうか。子どもたちのもつ感受性が私たちの内に新たな息吹をもたらすというような感覚を。

本稿は、町田そのこの『52ヘルツのクジラたち』に描かれている登場人物たちの姿をとおして、私たち誰もが抱える普遍的な「苦しみ」と、子どものもつ「傷つきやすさ」の大切さ、そしてそこから生まれるケアについて考えていく。それは「大人から子どもへ」ではなく、子ども自身も無意識のうちに「子どもから大人へ」と向けられ生じるケアである。

まず「2.」において、高井ゆと里の著書『ハイデガー 世界内存在を生きる』を取り上げ、ドイツの哲学者であるマルティン・ハイデガーの思想をたよりに、自己に縛られるという「苦しみ」について考えていく。その後、「3.」では、愛いとしという少年の姿をとおして、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスの「傷つきやすさ」という思想とケアの視点から、子どもと大人の関係について問い直す。そしてそれらを踏まえ、「4.」において、改めて現在の教育について思いを巡らせていきたい。

## 2. 自己に縛られる「苦しみ」

町田そのこの『52ヘルツのクジラたち』には、「苦しみ」を抱えた人々が多く登場する。

まずは、『52ヘルツのクジラたち』のあらすじについて簡単にふれたい。

### 「1 最果ての街に雨」

心に傷を抱えた三島貴瑚きこ（以下、キナコ）は、芸妓だった祖母が最期に過ごした大分県の海が見える古い家に移り住み、一人で暮らしていた。雨が降る中、お腹の傷が痛みうづくま躡るキナコの前に、言葉を発することのできない少年が現れる。少年は母親（琴美）と祖父（品城）から虐待を受けていた。雨が降る最果ての街での、キナコと少年の出会いの場面。

### 「2 夜空に溶ける声」

虐待を受けた少年がキナコの家を訪れる場面。一度目は、キナコが自分自身を虐待していた母親と、そこから救い出してくれた今は亡き岡田安吾おかだあんご（以下、アン）のことを思い出し、苦しんでいるときだった。筆談によってコミュニケーションをとることで、少年が母親と祖父から「ムシ」と呼ばれていることを知る。二度目は、幾日かが過ぎた夜のこと。少年が虐待を受け、キナコの家へと逃げてきた。キナコが少年を思い、クジラの52ヘルツの歌声について話す場面。（52ヘルツのクジラ…他のクジ

ラとは声の高さ一周波数が違うため、声が届かず世界で最も孤独だと言われるクジラ) キナコは少年を「52」と呼ぶことにする。

### 「3 ドアの向こうの世界」

キナコの過去の回想、<sup>きんいしゅくせいそくさくこうかしょう</sup>筋萎縮性側索硬化症—ALSを発症した義父の介護をしていた日々について描かれている。義父の病状の悪化に錯乱した母親が、キナコを責める。絶望を感じ、死を意識するキナコは、高校の級友の牧岡美晴と、その会社の同僚であるアンに出会う。キナコの家庭の現状を知ったアンが、キナコを救い出す場面。

### 「4 再会と懺悔」

美晴がキナコのところを訪ねてくる。キナコ、52、美晴の3人が、幼い頃に52の面倒を見てくれていた叔母の千穂を訪ねる場面。しかし、祖母の真紀子、叔母の千穂ともにすでに亡くなっていた。52の名前が「愛」<sup>いとし</sup>であること、言葉を発せないのは、三歳の時、母親(琴美)が煙草の火を舌に押し付けたからだということが分かる。

### 「5 償えない過ち」

キナコによる回想。アンに救い出されたキナコのその後が描かれている。就職先の上司である新名<sup>ちから</sup>主税との恋愛、アンとの関係が描かれている。主税に婚約者がいることが発覚するが、キナコは別れず愛人になることを選ぶ。キナコの知らないところで、キナコを守ろうとするアン。

### 「6 届かぬ声の行方」

アンの行動により社会的な信用を失った主税。その主税によりトランスジェンダーであることがアウトティングされてしまうアン。キナコは自殺をしたアンを発見する。精神的に変わってしまった主税に向け包丁を振り回したキナコ。揉みあい、包丁はキナコのお腹に沈んだ。

キナコとアン、主税の間で起きた出来事、キナコが大分に移り住んだ理由が、キナコから美晴への告白という形で語られる。

### 「7 最果てでの出会い」

大分に移り住んだ後に知り合った村中<sup>まほろ</sup>真帆から、52の祖父(品城)が「孫が誘拐された」と言っていることが知らされる。52の母(琴美)は、品城家中の金を掻き集め、新しいパートナーとすでに大分を離れていた。取り乱した祖父が「孫を返してくれんか」と村中の家に飛び込んでくる。しかし、村中の祖母の説得もあり、キナコたちが52の祖母、昌子(母親である琴美の母、品城の元妻)を訪ねることにして承諾を得る。

その日の夜、アンとクジラの夢を見るキナコ。『たすけて』の声で目を覚まし、52がいないことに気付く。堤防の上に立つ52を追いかけ、「守りたい」という気持ちを伝えるキナコ。手を差し出し、初めてその名を呼んだ。「わたしと帰ろう、愛」<sup>いとし</sup>。愛も初めて「キナコ！」と声を発した。

### 「8 52ヘルツのクジラたち」

キナコたちが、別府に住む琴美の母親であり、愛の祖母である昌子と、そのパートナーの<sup>しゅうじ</sup>秀治に

会う。キナコと愛が共に暮らすための方法について相談をした。2年後、キナコが未成年後見人になること、それまでは祖母の昌子が未成年後見人として面倒をみることが決まった。

別れの前日、村中家の庭でバーベキュー。村中の祖母さゑと話す中で、キナコの祖母キヨ子の最期の様子、キヨ子が幸せだったことについて知る。そんな中、琴美がいなくなってから急激に認知症の症状が進んでしまった品城が現れ、杖でキナコに襲い掛かる。それを横から突き飛ばす愛。警察沙汰になったその夜更け、堤防に座り、語り合うキナコと愛。キナコは、愛を救おうとしていたのではなく、愛によって自分が救われていたことに気付く。クジラの声を聴く二人。

冒頭、記したように、『52ヘルツのクジラたち』には、虐待やトランスジェンダー、難病、介護、愛人関係、認知症、または様々な過去から、生きにくさを抱える人々の姿が描かれている。また、その生きにくさは互いに影響し合いながら、さらなる苦しさを生み出している。それぞれの登場人物がもつ過去は、個別具体的なものであり、そこに生じている苦しさはそれぞれである。しかし、そこに描かれる苦しみの奥には、その根源とも言えるような、この世に生まれ、生きていく人間、誰もがもつであろう普遍的な「痛み」があるように思える。

## 2. 1. 「非本来的な在りかた」と「本来的な在りかた」という地平から

『52ヘルツのクジラたち』で描かれる人々の痛み。その奥にある私たち誰もがもつであろう普遍的な「痛み」について考えるにあたり、ドイツの哲学者であるマルティン・ハイデガーの思想がたよりになると思われる。

『ハイデガー 世界内存在を生きる』の著者である高井ゆと里は、ハイデガーの著書『存在と時間』から本文を引用しつつ、次のようにその思想を説明している。

「およそ人々は何のように生きるのがふつうなのかという、〈ひと〉としての生き方を前提として意味を与えられた世界へと「没入」することを通じて、私たちは〈ひと〉であることができるようになっていくのである。」(高井,2022:p.130.)

ここでいう〈ひと〉というのは誰のことでない。特定の人を指すものではなく、全員が〈ひと〉であり、私たちの日常の在りかたの存在の仕方を指定しているものである。

私たちが生きる社会のなかには、「こう在らねばならない」というような暗黙の前提がある。性別や年齢によるイメージ、法律や制度などの社会システム、家庭や学校における慣習や雰囲気など、私たちは人が生きる以上は逃れることのできない〈ひと〉としての生き方の内に曝されている。〈ひと〉としての生き方の内に没入し生きることで人は自ずと〈ひと〉となる。すべての人々が〈ひと〉である。

高井によれば、固有の生き方ではなく、誰でもない〈ひと〉という生き方に身を委ね、社会のうちに没入して生きているという意味で、ハイデガーはそれを「非本来的な在りかた」と表現したという。そして、それに対し、〈ひと〉であることへ没入することはせず、自分自身の内なる声によって「これが私である」と決意し、生きることを「本来的な在りかた」とした。

同じ著書から「非本来的な在りかた」と「本来的な在りかた」に関する高井の解釈を引用する。

「…非本来的な在りかたは、自分の身の回りにどのようなものがあり、どのように生活が上手く進んでいるかを気にかけ（「世界」からの理解）、他者たちがどのように生きているかという点から自分の生き方を決める（他者たちからの理解）在りかた、つまり「没入」的な在りかたを指している。対して本来的な在りかたは、自らを自分固有の生の可能性の側からことさら理解することであるとされる。

自分自身に何ができ、何に重きを置いて生きるべきかという「最も固有の存在できること」をはっきりと問い、それを明らかにすることが、本来的な在りかたを可能にするとハイデガーは考えているのである。」(高井,2022:p.145.)

〈ひと〉として生きることは、まわりと同じように生きる平安と居心地のよさを感じるものである。しかし、それは同時に他者に自らの在りかたを縛られ、固有の在りかたを放棄している状態、他者に支配されている状態とも言える。

これらのような、人間の根本的な在りかたの地平から『52ヘルツのクジラたち』を読み解いていくことで、それぞれの登場人物たちの姿から、私たちが抱える普遍的な「苦しみ」と、それを感受する「ケア」の思想が見えてくるのではないかと考える。

次に、『52ヘルツのクジラたち』の主要な登場人物であるキナコとアンの「苦しみ」についてみていきたい。

## 2. 2. キナコを縛る「意味」

キナコは、母親と義父から虐待を受けて育った。母親と義父との間には、真樹という弟がおり、両親の愛情はその弟に向いていた。高校卒業後、義父が筋萎縮性側索硬化症を発症し、鈍くなった体でトラックを運転し、事故を起こした。それにより義父は右足を切断。難病を抱え、右足を失った義父、母親はキナコを介護要員とした。一人で介護を続けるキナコ。そんなキナコに向けられた「こいつが死ねばいいのに……！」という母親の言葉により、キナコは自死を意識する。

「憎しみで真っ赤に染まる母の目を見ながら、絶望という言葉を知った。わたしがこれまで信じて生きてきたものは何だったのだろう。もう無理だ。もう、わたしにはこれ以上何もできない。ああ、もうどうでも、いいや。死んでしまっても、もういい。」(町田,2020:p.80.)

自らの死を意識するキナコは、病院を出て歩いているところで美晴とアンに出会う。その後、アンの救いによって、過酷な環境下から抜け出すこととなるが、新名主税との愛人関係、アンの自殺、自らの自殺未遂の経験を経て、物語の舞台である祖母が最期を過ごした大分へと移り住む。そして、「ムシ」と呼ばれた愛と出会うことになる。

キナコは虐待や暴力、人間関係、大切な人との死別、孤独の中で苦しみながら生きてきた。しかし、キナコの苦しみを生み出している根源は、それら具体的な出来事やキナコ自身の孤独だけなのだろうか。もちろん、他者からの加害、死、孤独は、キナコが苦しみをを感じる理由だろう。ただ、キナコの苦しみの根底には、それら表層的な理由だけではない、この世に生まれ、生きていく人間、誰しもが内に抱く普遍的な「苦しみ」があるように思われる。

キナコには、家族と暮らしていたときから、主税やアンと関係をもち、そして別れ、愛と出会い、共に過ごす日々に至るまで、物語全体をとおして、常に他者の「縛り」の中で生きている。あるいは、他者の「縛り」の中で、その世界に没入することで、キナコ自身が作り上げていった「意味」に囚われ生きているとも言える。その「意味」への囚われこそが、「苦しみ」の根源であると考えられる。そしてそれはキナコだけに留まらない、誰しもが抱える「苦しみ」の根源ではないだろうか。

例えば、以下のようなキナコの言葉は印象的である。

「主税が変わったのも、アンさんが死んだのも、全部わたしのせい。だからわたしは、わたしを殺してやろうと思った。こんな馬鹿な女、死んでしまえ。」(町田,2020:p.206.)

キナコと交際を始めた主税に婚約者がいることを知ったアンは、社内に噂を流し、主税の父親と婚

約者に手紙を送った。方法はどうであれ、アンにとってはキナコを守るための行動だったのだろう。その行為により、人が変わったように怒った主税は、キナコを愛人として軟禁し、暴力を振るうようになる。興信所にアンの素性を探らせ、アンがトランスジェンダーであることを知った主税は、復讐のためアンの母親にその事実をアウトティングしてしまう。そしてその後、アンは自殺することとなる。

キナコは主税の変貌も、アンの死も、すべてが自分のせいだと自らを責める。そして、自らを殺そうとする。「全部わたしのせい」という言葉に、キナコの他者（をはじめ、あらゆる物事）との出会い方の特徴が表れているように思える。果たして、主税の変貌も、アンの死も、キナコのせいなのだろうか。

キナコは、両親からの虐待という形で、「どのように生きるのがふつうなのか」という「意味」を強要し続けられてきた。およそそれは、「〈ひと〉としての生き方を前提として意味を与えられた世界」とも言えない、より狭義の偏った（虐待を繰り返す母親という他者によって作られた）「意味」ではあるが、キナコにとっては逃れることのできない世界そのものだった。なぜなら、母親のことを大好きだったから。

「わたし、お母さんが大好きだった。大好きで大好きで、だからいつも……いつも愛して欲しかった」（町田,2020:p.100.）

キナコは、母親に愛されたかったからこそ、母親の「意味」の世界に没入して生きてきた。

「お母さんに、愛されたかった。どうしたらまた、愛してもらえたんだろう」／それは、トイレの小窓の向こうに流していた思いだった。誰にも届かない、誰にも聞こえていない思い。」

（町田,2020:p.101.）

小学四年生の冬休みの後、母親から罰としてトイレでの生活を強要されたキナコ。小窓から入り込む月明りをぼんやりと見上げては、同じ光の下にいる同じような誰かにそっと話しかけることを覚えた。キナコは愛と出会った後、あの頃の自分を回想し、「52ヘルツのクジラ」と自分とを重ねる。あのときの自分は誰にも届かない「52ヘルツの声」をあげていたと。

虐待による心の傷は想像を絶するほど深いものだろう。そこから抜け出すことのできない寂しさと苦しさ。もしかしたら、母親にもキナコにも互いに依存傾向があったのかもしれない。ただ、ここでは、母親の「意味」の世界に没入し生きてきたキナコが、自ら作り上げた「意味」の世界に着目したい。

キナコには繰り返して見る夢がある。赤ん坊を抱いてうたた寝する母親と、赤ん坊を抱きあげ母親に労いの言葉をかける父親。お礼を言いながら、幸せを実感する母親。美しい光景、誰にも冒すことのできない幸福。それを遠くから眺めるキナコ。近くて、しかし遠いところにいる家族。様子を眺めていたキナコに気づいた父親は、能面のような、感情の消えた顔でキナコの頬をぶつ。母親はキナコの方すら見ない。

キナコにとって、こう在りたいという家族の幸せな関係が夢の中の前半に現れている。しかし、母親が強要し続けてきた現実と、キナコの願った世界にはギャップがある。そして諦めるかのように、キナコは自分自身に「声の届かない自分」という「意味」を与える。母親の虐待により、母親の作る「意味」に没入し囚われ生き、そこから離れた後にも、自分を対象化し「意味」付けしながら生きている。それは、自分自身の置かれた状況の中で、そこにある耐え難いギャップを自分の理解し得る形へと作り変え、把握することで、自分自身を守るための行為なのかもしれない。

「誰にも届かない声」をもつ自分。思いが誰にも届かない孤独な自分。キナコは自分の在りかたを「意味」付けし、対象化していく。そしてキナコは、周波数が違うため他のクジラに声が届かない「52ヘ

ルツのクジラ」と自分を重ねた。「52ヘルツの声」は、キナコの気持ちを慰めるものでありながらも、キナコ自身を縛る「意味」でもあったように思える。自分が自分の作った「意味」に囚われることで生まれる「苦しみ」。それこそが、キナコの苦しみの根源ではないだろうか。

『52ヘルツのクジラたち』では、「52ヘルツのクジラ」が、声の届かない孤独な人々の象徴のように取り上げられている。そしてその声を聴くことが他者を救うことにつながると。それは確かに大切なことだろう。しかし、他者の苦しみや自己の在りかたを意味付け対象化するということは、かけがえない他者や、あるがままの自分と「出会う」ことを妨げてしまうのかもしれない。

アンの助けにより21歳で家を出たキナコは、美晴の友達である美音子とルームシェアをした。そして仕事に就き、季節がひと巡りするころには友達もできて、生活がうまくまわるようになってきた。高井の言葉を借りるなら、キナコは多くの人がそうであるように「〈ひと〉としての生き方を前提として意味を与えられた世界へと「没入」すること」をこころみる。しかし、それもなかなか上手くはいかない。母親と離れたキナコだが、母親や義父からの縛りからは抜け出せずにいる。またそれに加え、主税との愛人関係など、他者に縛られるようになり、自らもそんな自分の在りようを理解可能な形へと「意味」付け、自己への執着を強めていく。例えば、愛人関係について、キナコは次のように考える。

「ああ、本当に『血』というのはあるのか。わたしには、妾の血が流れている。祖母はその血を糧(かて)に生き抜き、母は毛嫌いだのに一度はその血に従ってしまった。わたしもまた、その血に生きるのだろうか。」(町田,2020:p.178.)

またあるいは、キナコは義父への囚われからも解放されずにいる。物語の後半に、愛の祖父である品城が杖を振り回し、キナコへと近づいてくる場面では、すでに亡くなった義父の姿が見え、混乱してしまう。

「品城さんが、義父に見える。あれ、義父は確かわたしが出て行って半年ほどで死んだんじゃないかったか。恩知らずは来なくていいと言われて葬儀にも出ていないから、分からない。実は生きていて、わたしを叱りに来たのだろうか。」(町田,2020:p.254-255.)

キナコは、どこまでも他者による支配と自己への執着、「意味」に縛られるという自分自身による自己の支配から抜け出せずにいる。

「わたしは、わたしの声を聴いて助けてくれたひとの声を聴けなかった。もしわたしが彼の声を聴いていれば、全身で受け止めていれば。そうしたらこんな今にはなっていないはずだ。」

(町田,2020:p.73-74.)

他者からの支配、自己への執着、「意味」への囚われがキナコの「苦しみ」を生む。そしてそれはキナコだけに限ったことではない。〈ひと〉として〈ひと〉のなかで生きる私たちにとっての「苦しみ」でもある。

### 2. 3. アンを縛る「意味」

高井は『ハイデガー 世界内存在を生きる』の中で次のように記している。

「何らかの仕方で〈ひと〉になることができず、不当な扱いを受けることになる人々や、〈ひと〉になるために他の人々とは異なる次元の努力が要求され続ける人々は、確かに存在する。(中略)「世界への親しみ」を感じられず、世界全体が場合によってはいつもよそよそしく感じられざるを得ない人々は存在する。」(高井,2022:p.134-135.)

死ぬまで、トランスジェンダーであることをカミングアウトせず、心が男性だということを母親に

受け入れてもらえなかったアンは、まさに「他の人々とは異なる次元の努力」を要求され続け、「世界全体がよそよそしく」感じられざるを得ない、そんな日々を過ごしてきたのではないだろうか。

「良心の声として「私」に呼びかけているのは、「私」自身である。それも、居心地が悪く、世界を我が家として感じるこのできない不安の内にある「私」である。良心の声としての「私」は、本当は自分の存在には何の意味もないのではないかという「無」を前にたじろいでいる。」(高井,2022:p.164.)

高井の言葉を借りるなら、アンは自らに呼びかける「私」自身の良心の声を聞いている。アンは「およそ人々はどのように生きるのがふつうなのかという、〈ひと〉としての生き方を前提として意味を与えられた世界へと「没入」することができないまま、アン自身の求める在りかたとのギャップの中で苦しみ生きた。アン心の在りようを受け止められない母親の気持ちは、アン心を一層強く縛っている。また、アン自身も、身体的に女性である自分は、心も女性として生きることをふつうだという「意味」を自らの内に作り出しているように思える。それは、母親をはじめ、社会全体のもつ無言の圧力、〈ひと〉として生きる「非本来的な在りかた」との葛藤の中で形作っていった「意味」だろう。アン母親に宛てた遺書からもそのことが読み取れる。

「不完全な娘でごめんなさい。これまでに何度苦しめたでしょう。女の子として生きられないわたしのせいで、あなたにいらぬ涙を流させたことは数えきれません。(中略)願わくば、また今度もあなたの子供として生まれたいです。どうか、わたしをまた産んでください。でもその時には男として生まれますね。あなたの助けとなるような大きな体軀で、あなたを安心させられるような丈夫な心を持って生まれてきます。二度と悲しませないと約束します。だから今生は、親不孝を許してください。」(町田,2020:p.199-200.)

アンは自らを「不完全」という。主税に宛てた遺書の中でも自分を「不完全な人間」と表現し、キナコの傍に居るのは「欠陥のない人間」「心身ともに充実した人間」であるべきだと綴っている。アンは助けとなるような大きな体軀と丈夫な心をもった男性として生きることが「不完全」でない在りかたと捉えている。

「…〈ひと〉の世界を生きることは、一種の安心感や満足感をもたらすものでもある。〈ひと〉が意味ある生の在りかたとして承認している生き方を、自分もまた歩んでいること。その〈ひと〉と同じであるという事実そのものが、「私」の生が確かにうまくいっているのだという自信をもたらしてくれることがある。しかし、そうした平安や居心地の良さが破られてしまう可能性に、私たちは原理的にさらされている。」(高井,2022:p.207.)

アンには「〈ひと〉が意味ある生の在りかたとして承認している生き方を、自分もまた歩んでいる」という平安がない。アンは平安を破っているのは、自らがトランスジェンダーであるという事実だろう。しかし、見方を変えるならば、「〈ひと〉が意味ある生の在りかたとして承認している生き方を、自分もまた歩むべきだ」という囚われが、アンにはあるように思える。それはキナコが受けていた虐待やアンが隠していたトランスジェンダーという事実それ自体から生じる苦しみとは異なる。自らに呼びかける「私」自身の良心の声、そこから生まれる不安の内から抜け出すことができないアン。〈ひと〉による縛りと、自らが作り上げた「意味」に囚われるという「苦しみ」である。そしてアン「意味」への囚われは、死と結びついてしまう。キナコを愛していただろうアン。キナコと共にいることはかなわない。キナコを守ることもできない。そんな思いのなかで、アンは死を選んだ。

アンは、〈ひと〉の内でも〈ひと〉が承認している生き方を歩もうとすると同時に、〈ひと〉として生きることができない居心地の悪さ、不安を抱え続けてきた。高井は、ハイデガーの言葉を引いたうえで、

「ある仕方で「自分自身は誰であるか」を掴みなおすような経験」(高井,2022:p.159.)が「本来的な在りかた」へ通じていると説明している。アンは、ハイデガーのいうような「掴みなおすような経験」をすることなく、「非本来的な在りかた」の内では不安を抱え続けたのではないだろうか。

アン<sup>1</sup>の遺書のなかには「わたしは彼女の心身の両方を満たせる自信はなく、そんなわたしが彼女を望めばいつか彼女を苦しめるでしょう。(中略)そろそろ、彼女の新しい人生の過去の登場人物にならないといけないのだと思います。ですから、貴<sup>2</sup>には黙って逝<sup>3</sup>きます。」(町田,2020:p.201-202.)とある。キナコの心身の両方を満たすこと、キナコを幸せにすること、そう在らねばならないという思いと同時に、そう在ることができない現実。それらは、アンが〈ひと〉の内では〈ひと〉として生きることができずに抱え続けてきた不安を、より強く、より大きなものにしていったのではないだろうか。自らの命を終えようと思うほどに。

不安を抱え続けたアンが、生き続けられる道はなかったのだろうか。高井は、ハイデガーの思想を次のように解釈し、「不安」には否定的な機能だけでなく、「本来的な在りかた」へと通じる肯定的な機能もあることを記している。そしてそれは私たちに、アン(苦しむ人々)が生きること、その可能性を示しているようにも思える。

「…ある生の在りかたが一般に意味ある生として認められていることと、それが「私」にとって意味ある生であることのあいだには、ギャップがありうるからである。この、各人が「私」である以上避けがたい実存ギャップの存在に明示的になるとき、人は〈ひと〉としての平安を失い、不安を抱くとハイデガーは述べる。その情動は他方でしかし、「私にとって意味ある生とは何か」を問うという実存の問い、そしてまた本来的な在りかたへと通じている。」(高井,2022:p.208.)

ハイデガーは、「不安」という情動が「自らにとって意味ある生とは何か」という問いへと通じているとしている。そして、自らの生の在りようを見つめ直し、新たな一步を踏み出すことで、私たちは「本来的な在りかた」を掴み取ることができると主張する。「私にとって意味ある生とは何か」という問い。それは、「自分自身は誰であるか」を掴みなおす問いである。

高井は『ハイデガー 世界内存在を生きる』の後半で、「男性」として生きることには底知れない違和感を覚えた若者の例を挙げている。ある日、若者は「ノンバイナリー」という言葉に出会い、「男性でも女性でもない性」を自らのアイデンティティとして生きている人々のことを知る。その事実により、若者にとって世界の見え方が大きく変わる。「自分自身は誰であるか」を掴みなおす問いには、そのように新たな「意味」を見出し、自らの生の在りかたを変える、そんな可能性が秘められているのではないだろうか。高井は、「本来的な在りかた」という思想に、(アンのように不安を抱え)苦しむ人々が「自らの生に手応えを持つ」ことができる可能性を見出している。もしもアンが、〈ひと〉の内では在りながらも〈ひと〉が求める「意味」とは異なる「意味」を掴めたならば、あるいは、アン自身がこれまでの自分の生に、それまでとは異なる「意味」を見出すことができたとしたら、彼はどのような道を歩んだだろうか。「意味」を問い、「意味」を掴みなおすこと。自らの生を問い直すこと。それは、自らの生の在りかたをよりゆたかなものにしていくのではないだろうか。

以上のように、私たちは、ハイデガーや高井の思想をたよりとすることで、『52ヘルツのクジラたち』の登場人物から多くの示唆を得た。その上で、本稿の後半においては、それらとは異なる考えを提示したい。それは『52ヘルツのクジラたち』に描かれているケアの思想である。

「3.」以降において後述するケアは、「意味」を問い、掴みなおすという認識の次元とは異なる次元

にある。そこでは「意味」は自ら作り上げるのではなく、与えられる。「意味が与えられる」こと、それを受容すること。そこには、「意味」を問う地平とは、異なる地平が広がっている。

例えば、神谷美恵子が著書『生きがいについて』のなかで記している次のような言葉は、そのようなことを端的に表しているように思える。

「…生の内容がゆたかに充実しているという感じ、これが生きがい感の重要な一面ではないか。ルソーは『エミール』の初めのほうでいっている。「もっとも多く生きたひととは、もっとも長生<sup>ながいき</sup>をしたひとではなく、生をもっとも多く感じたひとである」と。」(神谷,2004:p.23.)

神谷のつかう「充実しているという感じ」「生をもっとも多く感じたひと」という言葉に着目したい。私たちの「生の実感」の多くは、認識の次元ではなく、感覚の次元に属しているのではないだろうか。生を感じることは、「意味」を作り上げるというような思惟的な行為ではない。まさに、「与えられる」ものの感受である。時に認識は、感覚の次元における「生の実感」の妨げとなるのかもしれない。『52ヘルツのクジラたち』における登場人物たちの姿から、私たちはそう考える。

## 2. 4. 〈ひと〉と「意味」による支配

キナコも、アンも、〈ひと〉になることができないまま、〈ひと〉による支配のなかで、生きにくさを抱えながら、自らの「意味」に囚われ、執着し、生きている。

人間として生まれ、社会のなかで生きる私たちは、誰もがそのような「苦しみ」を抱える可能性をもっている。〈ひと〉に身を委ねてしまい、〈ひと〉であることに没入し、盲目的に生きることができなければ、その普遍的な「苦しみ」に気づかないまま過ごすこともできるかもしれない。しかし、そうはいかない人々が確実に存在する。そして、それは決して少数ではない。

例えば、岡真史の『ぼくは12歳』に、岡少年が綴った以下のような詩がある。〈ひと〉による支配について考える一助となると考えられるため、全文を引用する。岡君の言葉には、他者(〈ひと〉としての生き方)に、自らを支配され、奪われていく感覚が現れている。

### 無題

にんげん／あられずりのほうが／そんをする／すべすべ／してた方がよい／でもそれじゃ／この世の中／ぜんぜん／よくならない  
 この世の中に／自由なんて／あるだろうか／ひとつも／ありはしない  
 てめえだけで／かんがえろ／それが／じゅうなんだよ  
 かえしてよ／大人たち／なにをだって／きまつてるだろ／自分を／かえして／おねがいだよ  
 きれいごとでは／すまされない／こともある／まるくおさまらない／ことがある  
 そういう時／もうだめだと思ったら／自分じしんに／まけることになる  
 心のしゅうぜんに／いちばんいいのは／自分じしんを／ちょうこくすることだ／あられずりに／あられずりに……

(岡,1985:p.123-126.)

「すべすべ」という言葉は、〈ひと〉として生きるということ、直感的な言葉で表現しているように思える。なんの摩擦もなく、こうあるべきだという社会や、大人のもつ「意味」に没入して生きる。「すべすべ／してた方がよい」そこには平安と居心地のよさがある。しかし、岡君はそれによって自らの自由が奪われ、自分自身が奪われていくことを自覚している。「かえしてよ／大人たち／なにをだっ

て／きまつてるだろ／自分を／かえして／おねがだよ」という言葉は、その奪われていくという実感を率直に吐露しているように思える。もう一つ、岡君が死について綴った詩を取り上げる。

ぼくはしなない

ぼくは／しぬかもしれない／でもぼくはしねない／いやしなないんだ／ぼくだけは／ぜったいにしなない／なぜならば／ぼくは／じぶんじしんだから

(岡,1985:p.129.)

岡君の「ぼくは／しぬかもしれない」という言葉からは、社会や大人のもつ「意味」によって、自らの自由や自分自身が奪われていく心の痛み、社会に飲み込まれそうになりながら、求められることに応えて生きることのできない苦しさが強く伝わってくる。このままでは死ぬかもしれない。しかし、岡君は「でも…」と自らを奮い立たせる。「しねない」「しなないんだ」「ぜったいにしなない」と、社会や大人から押し寄せる「意味」の波に飲み込まれないよう、自らを保ち続ける。「ぼくは／じぶんじしんだから」と詩を締めくくる岡君。「じぶんじしん」を手放さないよう、強く抱きしめるかのように。

岡君の「じぶんじしん」を奪い去ろうとするもの、岡君を苦しめるものはなんだろうか。「自分を／かえして／おねがだよ」岡君の言葉を読んでいると、それは〈ひと〉であり、大人たちの作る「意味」であるように思えてならない。

1975年7月17日、岡真史君は近所の団地で投身した。享年12歳9カ月だった。もちろん、少年の苦しみや死を、一つの考えで意味付けてしまうことは適切ではない。ただ、私たちは〈ひと〉の内から逃れることができない。それはまた、子どもたちも同じであり、その「苦しみ」を抱え生きる子どもたちがいるという事実から、目をそらしてはいけないうらう。岡君の言葉は、その事実を強く物語っているように思える。

キナコやアンをはじめ、誰もが受ける〈ひと〉と「意味」による支配、それにより生じる「苦しみ」や、それらへの囚われから生じる「苦しみ」。私たちは、それについてどう向き合えばよいのだろうか。あるいは、それらをケアするものとはなんだろうか。

### 3. 「傷つきやすさ」から生まれるケア

以上のように、『52ヘルツのクジラたち』には、著者である町田が意図するかしなないかは別として、〈ひと〉として生きていくことに難しさを感じる人々、自己に縛られ、自己の作り上げた「意味」に囚われ「苦しみ」の中で生きる人々の姿が現れている。しかしまた、『52ヘルツのクジラたち』には、物語全体を通して、そんな「苦しみ」をケアする存在も描かれている。それは、「ムシ」と呼ばれた少年(52、以下 <sup>いとし</sup>愛)である。

「3.」では、『52ヘルツのクジラたち』が潜在的に内包している「ケア」についての思想を、<sup>いとし</sup>愛の姿とおして考えていきたい。

#### 3. 1. <sup>いとし</sup>愛のもつ「傷つきやすさ」

<sup>いとし</sup>愛は、キナコが「苦しみ」に襲われるとき、キナコの前に現れる。はじめは、キナコが自らの現状に焦燥感を抱いたときだった。

「目の前に、雨の紗幕<sup>しやまく</sup>がかかっている。やっとな馴染んできた風景が顔つきを変えて、見知らぬ場所

に迷い込んだような錯覚を覚える。さっきまでと空気の温度も変わって、やわらかな雨音だけが耳に優しく響く。かさかさとした音がして目を向けると、どこから現れたのか小さなカエルが這っていた。雨に呼ばれて出てきたのだろうか。／「どうして、こんなところにいるんだろうね。」(町田,2020:p.14.)

小さなカエルにかけた言葉は、そのまま現在のキナコ自身へと向けられている。あるいは、その後現れる愛の存在を予感させるかのようなやりとりである。

「膝を抱え直し、目を閉じようとした時、水を跳ねる足音がゆっくりとこちらに近づいてきているのに気が付いた。思わず身構えると、サーモンピンクのTシャツにデニム姿の子どもが、傘も差さずに歩いてきた。遊んでいて、雨に降られたのだろうか。」(町田,2020:p.14-15.)

「女の子は足を止め、不思議そうにわたしを見つめた。しかしそれは一瞬のことで、ついで目を逸らしたかと思えば再び歩き始めた。」(町田,2020:p.15.)

女の子だと思ったその子は、親から虐待を受けていた少年、愛だった。

愛は、ただ不思議そうにキナコを見つめるだけだった。何気ないたった一瞬の出来事だが、愛がキナコという他者に初めて出会った瞬間だった。その後、愛はキナコに引き付けられるかのように、キナコの前に現れるようになる。

二度目は、キナコが疋田さんというおばあさんから、働かず暮らしていることを「あんた、人生の無駄遣いやがね」と責められ、精神的に不安定になったときだった。

「痛い、痛い。包丁が突き刺さったあの時と同じ痛みで、息ができない。(中略)体が勝手に震え、涙がぼろぼろと零れた。このまま、死んでしまうかもしれない。誰もわたしを知らない場所で、ひっそり死んでしまうかもしれない。／「アンさん、アンさん」／こんな時、呼んでしまう名前はひとつしかない。／「助けて、アンさん」」(町田,2020:p.24.)

苦しみの中で、今は亡きアンの名前を呼ぶキナコの前に、愛が立つ。

「食いしばった歯の隙間から絞り出すように言うと、ぴたりと雨が止んだ。驚いて顔を上げると目の前にジーンズを穿いた足がにゅと伸びていて、もっと見上げると、飛んでいったはずのわたしの傘を差した女の子がいた。」(町田,2020:p.24.)

「女の子が小首を傾げて、自分のお腹の辺りを撫でる。」(町田,2020:p.24.)

三度目も、キナコがアンのことを思い出し、泣き続けていたときだった。キナコが悲しみに押しつぶされそうになるとき、愛は現れる。キナコの痛みを引き付けられるかのように。

「何度も呼んでいると、声が潤んできた。届かない祈りは、舌に載せるたびに体が痺れて呼吸ができなくなる。気付けば天を仰いで声をあげて泣いていた。／どれくらい、泣いただろう。頭が割れるように痛くなり、顔が涙と鼻水でぐしょぐしょになったところ、玄関の引き戸がほとほと叩かれる音が聞こえた。」(町田,2020:p.44.)

「汚い泣き顔をして顔を引き攀らせるわたしを見て、少年は驚いたように口を開けた。おろおろとし始め、自身のお腹の辺りをぐるぐると擦る。」(町田,2020:p.45.)

愛は、なぜ、キナコのところに来たのだろうか。『52ヘルツのクジラたち』に、その理由は記されていない。愛は、ただ苦しむキナコという他者に出会う。そして、キナコの傷を思い、寄り添うかのように、自分のお腹を撫でる。

『52ヘルツのクジラたち』の中に登場する「愛」という存在は、子どものもつ「傷つきやすさ」と、その「傷つきやすさ」により生じる他者へのケアについて語っているように思う。著者である町田がそのことについて意識しているかどうかは分からない。あるいはそれは、『52ヘルツのクジラたち』と

いう物語の中で生じている潜在的な「ケア」の思想なのかもしれない。

愛がキナコのところに来たことに理由はないのだろう。あえて言うならば、理由はいらぬ。愛は何かのために、キナコに出会うのではない。キナコの抱える「苦しみ」をそのまま感受するかのように出会う。キナコが崩れ落ちそうになるとき、どこからともなく現れるその不思議な様子は、そのような愛の心性を物語っているようにも思える。

また、愛が「小首を傾げて、自分のお腹の辺りを撫でる」のも、「驚いたように口を開け」「おろおろとし始め、自身のお腹の辺りをぐるぐると擦る」のも、キナコの心の痛みに、ただただ自分自身も傷つくような感受性の現れではないだろうか。

「彼を見れば、わたしに一步だけ近づいて顔を覗きこんでいた。色素の薄いガラス細工のような瞳が、わたしを捉えて揺れている。」(町田,2020:p.47.)

愛は、母親から受けた虐待のために、言葉を発することができない。しかし、愛のキナコとの出会い、愛の在りかたには言葉すらいらぬように思える。あるいは、言葉がないからこそ、愛の姿からその感受性がより一層感じられるのかもしれない。それは、言葉とは異なる位相での出会いだと言えるだろう。他者の痛みにそのまま傷つく、夾雑物のない感受性の次元。他者の心の痛みを感受する、あるいは感受してしまふ、愛のもつ「傷つきやすさ」。

フランスの哲学者であるエマニュエル・レヴィナスは「傷つきやすさ」や感受性について、「身代わり」という言葉で語っている<sup>2</sup>。以下、レヴィナスの著書『存在の彼方へ』から引用する。

「[他人によつて]であると共に「他人のために」[他人の代わりに]であるのだが、このとき疎外が生じることはない。そうではなく、〈同〉は〈他〉によって息を吹き込まれるのだ。このような吸気ないし靈感が心性である。それゆえ心性は、「みずからの皮膚の内側にあること」として「みずからの皮膚の内側に他人を宿すこと」として、同を疎外することなき同のなかの他性を、受肉の相のもとに意味しうるのだ。」(レヴィナス,1999;訳,p.266.)

まさに、愛は「みずからの皮膚の内側に他人を宿」し、「身代わり」になるという仕方で他者に出会っている。それは、レヴィナスの言葉のとおり、自らを「疎外」することではない。他者の苦しみが自己の内に入り込んできて、その他者を宿すということ。この他者を宿し、身代わりになる「傷つきやすさ」こそが、愛の「他者(キナコ)の感受」につながっているのではないだろうか。「自分のお腹の辺りを撫でる」という仕草は、愛がキナコという他者を自らの内に宿し、身代わりとなっている、その現れであるだろう。

そしてそれは、愛に限らず、子どもたちがもつ心性(心の在りかた)と言える。『52ヘルツのクジラたち』は、愛の存在をとおして、その大切さについて語っているように思われる。

### 3. 2. 愛の他者との出会い

愛は、多くの子どもたちがそうであるように、感受性の次元において、他者と出会っている。私たちは『52ヘルツのクジラたち』を読み、そう考えている。

一方、「2. 2.」で取り上げたように、キナコからはそのような他者との出会いを見て取ることができない。もちろん、愛のことを思い、助けになりたいという気持ちはあるだろう。しかし、キナコは、自分の過去や自分の作り上げた「意味」に縛られるがゆえに、愛のように(他者の心の痛みに傷つくように)は他者と出会えていない。キナコは愛との出会いも、次のように「意味」付けている。

「わたしがこの子にしようとしていることはきっと、聴き逃した声に対する贖罪だ。消えることの

ない罪悪感をどうにか拭おうとしているのだ。」(町田,2020:p.74.)

アンの心の痛みに気づけなかった自分を責めるキナコは、愛への自らの行為を「贖罪」と意味付ける。自らの内にある罪悪感をぬぐうために、自らを犠牲に、または自らの今を代償にしようとする。意識の次元においてキナコが向き合っているのは、キナコ自身であり、愛ではなかった。しかし、意識を越えた次元では、キナコ自身も愛をケアしようとしている。愛を迎え入れ、愛の苦しみにふれようと。キナコもまた、他者の心の痛みに傷つくように、他者を受容するという感受性を、自らの内に秘めている。「贖罪」という意味付けの後に、キナコは次のように想いを巡らせている。

「でも、それでもいい。彼の代わりだとしても、純粋な思いじゃないとしても、今はこの子を助けたい。こんなわたしでも、できるのならば。」(町田,2020:p.74.)

「彼の代わり」という「意味」が他者(愛)との出会いを妨げている。ただ、キナコは「今はこの子を助けたい」という想いに突き動かされる。

自らがもつ「意味」が他者と出会うことを妨げる。そう考えると、私たちが本当に他者と出会うということは、とても難しいことのように思えてくる。

例えば、家庭や学校において、大人が子どもに「寄り添う」という言葉をよく耳にする。「寄り添う」という言葉は一つであるが、その内実はかなり多様である。子どもの話に耳を傾けることをもって寄り添ったと考える人もいれば、子どものしたいことをサポートすることをもって寄り添ったと捉える人もいる。しかし、必ずしもそれらの行為は、子どもの存在に寄り添っているものとは言えないのではないだろうか。家庭でも、学校でも、大人は子どもにこうなってほしい、そのために何をするか、という意図をもっている。あるいは、こう在るべきだとか、こうするべきだとか、〈ひと〉として生きるために必要と考える「意味」を内に抱きながら子どもに接する。そのような「意味」をもつことは、もちろん必要なことである。しかし、子どもに「寄り添う」といったとき、その「意味」は大きな妨げになるのではないだろうか。「寄り添う」とは、子どもという目の前の「他者に出会う」ことから始まるのだろう。「意味」に縛られたとき、大人は(キナコのように)寄り添っていると考えていながら、他者ではない自己に執着してしまう。果たして、今、自分は目の前の子どもと出会っているのだろうか。すべての「意味」を脱ぎ捨てて、今、目の前に立つ一人の「他者」に出会っているのか。子どもたちの教育にかかわる私たちは、そのことについて、日々注意深く問い続けなければいけないのだと考える。

同じように、キナコのまなざしは、愛という他者ではなく、愛をとおして自らの内面へと向かっている。「わたしは変わろうとしているのだろうか。」(町田,2020:p.190.)と自らに問うキナコ。自分のもつ「意味」と、自己の苦しみ、自らの変化、キナコの目の前には傷ついた自分の姿がある。

それとは対照的に、愛のまなざしは、純粋に「他者」へと向かっている。そう感じられる理由には、愛が言葉を発しないことや、愛の内面が描かれていないということもあるかもしれない。感受性を伴わない表面上の言葉は「意味」の世界に属し、他者との出会いを阻害する。先に挙げた「寄り添う」という言葉も同様だろう。しかし、それ以上に、愛の姿からは他者を他者として感受する心の在りかたが見て取れる。まさに、愛はあるがままに他者と出会っている。

例えばそれは、大人たちの愛に対する呼び名、それに対する愛の在りかたからも見て取ることができる。愛は、母親と祖父から「ムシ」と呼ばれていた。

「キナコって呼んでね。じゃあ、次はあんたの名前ね。はい」／棒きれを渡して、少年を窺う。棒を手にじっとしていた少年は、少しだけ考えて、それからゆっくりと『ムシ』と書いた。」

(町田,2020:p.52.)

愛は、虐待を受けながらも母親と祖父を受け止めていた。「棒を手にじっとしていた」愛は何を考  
えていたのだろう。それについては想像することしかできないが、「ゆっくりと『ムシ』と書いた」こ  
とから「ムシ」と呼ばれることさえも受け止めていることが読み取れる。また、愛は、キナコが愛の  
ことを「52ヘルツのクジラ」と重ね、「52」と呼ぶことも受け止めている。大人たちは自らの都合で呼  
び名を変え、愛という他者を対象化し、それぞれのもつ「意味」の世界へと引き込む。一方、子ども  
である愛は、あるがままの他者(母親、祖父、キナコ)を受け止める。キナコは愛に語りかけた。

「わたしさ、あんたの呼び名をずっと考えてたんだ。だってムシなんて呼べないもん。でも今思い  
ついた。あんたがわたしに本当の自分の名前を教えてくれるまで『52』って呼んでもいい？わたしは、  
あんたの誰にも届かない52ヘルツの声を聴くよ。いつだって聴こうとするから、だからあんたの、  
あんたなりの言葉で話しな。全部、受け止めてあげる」(町田,2020:p.73.)

アンの声、聴き逃した声に対する贖罪として、「52」の声を聴こうとするキナコ。「52ヘルツの声  
を聴くよ」その言葉は、キナコのもつ「意味」を強めていく。愛はそんなキナコの内心とは別に、キナ  
コのありのままを受け入れる。それは決して、キナコの内面を意識してのことではない。認識の世界  
でキナコの状態を把握し、「だからこうしてあげよう」と受け入れているのではない。初めて「52」と  
呼ばれたときの愛の反応は次のようなものだった。

「少年はびっくりとして、わたしを見る。月明かりに照らされた目は澄んで、涙で濡れている。」

(町田,2020:p.73.)

愛は、涙に濡れた目で、ただキナコを見る。不安や驚き、喜びが入り混じった愛の反応。愛はキナ  
コの言葉を、思考を挟まず、あるがままに感受する。

母親からの愛情も、子どもが受け止めてくれるからこそ、その気持ちは愛情として子どもに届く  
のではないだろうか。家庭教育も、学校教育も、大人が教えれば成立するというものではない。それら  
は子どもによって引き受けられ、受け入れられることではじめて成り立つ。もし、子どもたちが大人  
からの言葉や行為、その思いを受け止めることなく、その場から離れていくなれば、家庭の躰も、学  
校の授業も成立はしない。つまり、事大人と子どもの関係、そこに生じる行為の成立については、子  
どもの感受に委ねられている。見方によっては、虐待でさえも同じことが言えるのかもしれない。子  
どもたちは親を愛し、親の「<sup>いとし</sup>苦しみ」さえも受け入れてしまう。

キナコがはじめて「<sup>いとし</sup>愛」という名前を呼んだときも、愛は溢れるほどの感受性でキナコの想いを受  
け入れた。

「わたしと帰ろう、<sup>いとし</sup>愛」／月明りの下、彼が大きく震えるのが分かった。それから、夜空を仰ぐ。  
波の音だけが広がっていた世界にああ、と声が響いた。ああ、ああ、と愛は体を折って声を上げる。  
その姿は何かと闘っているようで、わたしは手を出したまま見守る。溢れる涙を拭った愛は、わたし  
を見て叫んだ。／「キナコ！」(町田,2020:p.237-238.)

愛は自らのもつ「傷つきやすさ」によって、認識の次元ではなく、感受性の次元において、目の前  
のありのままの「他者」に出会っている。その「他者」との出会い方は、『52ヘルツのクジラたち』の登  
場人物の中においては、異色である。愛の姿は、本当の意味で「他者と出会う」とはどういうことな  
のかを物語っている。

### 3. 3. 「ケアしてしまう／ケアされてしまう」という地平

『52ヘルツのクジラたち』は、心に傷を負ったキナコが「ムシ」と呼ばれた少年を守ろうとする中で、過去と向き合い、回復していく物語のように読めるかもしれない。そして、「ムシ」と呼ばれた愛も、52ヘルツの声を聴いてもらい、救われたと。しかし、「苦しみ」と「ケア」の視点から、物語と向き合ったとき、そこには『52ヘルツのクジラたち』が内包している異なる世界が現れる。それは、「傷つきやすさ」という子どものもつ感受性、心の在りかたにふれることで、(他者や自らが作り上げた「意味」に縛られ苦しむ)大人の内に本来ある感受性が、息を吹き返していく物語。

最後にキナコが語る言葉にも、そのことがよく表れている。

「…あんたのことを考えて、あんたのことで怒って、泣いて、そしたら死んだと思っていた何かが、ゆっくりと息を吹き返してたんだ。わたしはあんたを救おうとしてたんじゃない。あんたと関わることで、救われてたんだ」(町田,2020:p.257-258.)

愛と出会ったキナコがそうであったように、私たちにとって、子どものもつ「傷つきやすさ」にふれること、感受性の次元において「他者と出会う」ということは、大人のもつ「意味」、自らを縛る「意味」を脱ぎ捨てていくことでもあるのかもしれない。子どもたちのもつ感受性にふれるとき、私たちは「意味」の世界以前の世界、感受性の地平に誘われているのではないだろうか。

愛がキナコの「苦しみ」を感受し、あるがままのキナコに出会うことで、キナコは救われていった。「全部わたしのせい」という考えも、「贖罪」という捉えも、自らを守るために固めた「意味」でありながら、自らの「苦しみ」を生む「意味」だった。それらが少しずつ剥がれ落ちていく。キナコは愛との日々をとおして、キナコ自身の言葉にもあるように「ゆっくりと」意味を脱ぎ捨てながら、まさに愛と出会っていった。キナコは愛にケアされることで、同時に「他者(愛)と出会う」ことができていたのではないだろうか。それは、ケアされることで、同時にケアする存在としてあれたということ。ケアされたからケアする、あるいはケアしたからケアされるという因果関係ではなく、キナコと愛の出会いのなかで「ケアされる／ケアする」という在りかたが生じているということ。

人は本来、他者と出会い、他者を受け止めることのできる存在なのではないか。生まれた赤ん坊が無条件に母親を受け入れるように。母親の表情一つで世界の色合いが変わったかのように泣く子どものように。しかし、キナコやアンをはじめ、多くの大人が自らの「意味」に縛られ、自己に執着するがゆえに、あるがままの「他者」と向き合うことができないように思える。ただ、誰しも、他者と出会い、他者の痛みを傷つく、そんな感受性を自らの内に秘めている。だからこそ、キナコは、他者の痛みを自らの内に宿すような「ケアされる／ケアする」感受性の地平に立ったのだろう。さらに言うならば、私たち人は、本来「ケアしてしまう／ケアされてしまう」存在なのではないだろうか。自らの「生の意味」を作り上げるという思惟的な在りかたとは異なり、「ケアしてしまう／ケアされてしまう」という感受性の地平では「生に意味が与えられる」。人は潜在的にケアしようとしている存在なのだが、ケアしようとしている自分や、すでに「生に意味が与えられている」ということに、(キナコをはじめ)多くの人々が気づかずにいるのではないか。

子どもの感受性にふれ、自らの内にある感受性に気付いていく大人。「2. 3.」で詩を引用した岡君の父親もそうだった。岡君は12歳で自らの命を絶った。息子の死後、出版された『ぼくは12歳』のあとがきとして、父親である高史明が綴った言葉を引用したい。

「真史の死後、わたしどもはこの詩の手帖をめくりつづけていて、いつの頃からか、この世の出来

事を見る目が変わっていることに気づかされました。この世には、生き易く見えながら、いやでも生き難さを直視せざるを得なくする出来事が、あまりにも多くあります。それらの出来事が目にふれたとき、わたしどもの全身は、言葉が生れでるより先に、その苦、その悲のそばにより添おうとすようになってきました。直接そばにゆけるものでもなく、また、何かができるということでもありませんが、悲そのもの苦そのものにより添ってしまうのです。それまでのわたしどもは、そうではありませんでした。より添おうとする思いがなかったのではありませんが、そこにはまず、解釈が先に立っておりました。それが、すうっとただより添ってしまうのです。しかも、いまははっきりと意識することができますが、それが真史の死後、わたしどもを生きつづけさせてくれた静かな力でした。」

(岡,1985:p.181.)

「わたしどもはこの詩の手帖をめくりつづけていて、いつの頃からか、この世の出来事を見る目が変わっていることに気づかされました。」という高は、息子の詩を読むことを通して、岡君の感受性にふれていったのではないだろうか。または、岡君が詩に書いた、「すべすべ」した「きれいごと」の「世の中」、大人のもつ「意味」の世界が、子どもから「自分」を奪っていくと感じたのかもしれない。

「わたしどもの全身は、言葉が生れでるより先に、その苦、その悲のそばにより添おうとすようになってきました。」高の書いた「言葉が生れでるより先に」とは、まさに「意味」の世界以前の世界を表しているように思える。考えるよりも前に他者の苦しみや悲しみを感じてしまう。「そこにはまず、解釈が先に立っておりました。それが、すうっとただより添ってしまうのです。」解釈も同じく「意味」の世界であり、ただ寄り添ってしまうという在りかたは、解釈以前の感受性の次元での他者との出会いそのものだろう。息子の死の悲しみを背負った高をケアしたのは、今は亡き息子の岡君だったのかもしれない。岡君の両親は、岡君の死後、苦しみを抱いた若者との手紙のやりとり、交流を深めていった。まさに、子どもの感受性にケアされると同時に、自らもケアする存在としてあると言えるだろう。両親は、亡き岡君と共に「ケアしてしまう／ケアされてしまう」という地平に立っている。

『52ヘルツのクジラたち』には、子どもがもつ「傷つきやすさ」、意識を越えて他者の痛みを受け取ってしまう感受性にふれること、そのことによって「生に意味が与えられる」こと、自分にもその感受性があること、それらに気づいていく、そんな人の姿が描かれているように思える。あるいは、直接的には表現されていないが、著者すらも意識しないうちに、登場人物たちのかかわりの中で、潜在的にそのようなエッセンスが生じているということも考えられる。また、あわせて引用した岡君と父親である高の言葉からも、それらのことは強く感じられるだろう。

子どものもつ「傷つきやすさ」、意識を越えて他者の痛みを自らの内に宿すという在りかた、それらは私たちが本来もっている「他者の痛みを自らの内に宿す」という感受性を呼び起こす。そのとき私たちが立つのは、自らが作り上げた「意味」の世界以前の世界であり、「他者と出会う」というケアの地平であると考えられる。

もちろん「意味」を求めることは尊い。そしてそのような生き方は、時に自らの生をゆたかなものにしてくれる。しかし、「本来的な在りかた」として、自らの「生の意味」を作り上げること、そこには常に「絶望」の影がつきまとう。それに対して、ケアによって私たちの内に生じるのは、「意味」を作り上げるといふ思惟的なものではない。それは「生に意味が与えられる」という感受性の地平における「自らの生」や「他者の生」そのものの感受である。ケアの地平に立ったとき、私たちの生は「他

者と出会う」なかで、より彩りゆたかなものになっていくのではないだろうか。

#### 4. 「他者に出会う」という地平から

『52ヘルツのクジラたち』をとおして見えてきた「他者に出会う」というケアの地平から教育を見つめ直すならば、そこには何が観えてくるだろう。

現在、学校教育には「意味」を重視する側面が強くなるように思われる。授業や学力に関する調査等、日常的なやりとりにおいても、子どもたちは言葉や数字、物事の「意味」を問われ、考える。社会の仕組みや人との関係、自然、出来事を対象化し、「意味」付け理解することを求められる。もちろん、日々変化する世界の中において、社会や経済の発展、未来の生活の充実を目指すために、それらは必要なことだろう。しかし、あまりにも「意味」を求め過ぎてはいないだろうか。

子どもたちがもつ感受性は、子どもたちの他者（あらゆる人やもの、出来事など）との出会いを支えている。言い換えるならば、子どもたちの学びの根底を支えるものとも言える。子どもたちの外側から、様々な価値や意味を伝えることも大事だが、そのような本来子どもが内にもつ、ゆたかな感受性、ゆたかな世界に、私たちはより自覚的になる必要があるのではないだろうか。

学校は、教師が教え、子どもが学ぶ。あるいは子どもが学び、教師はそれを支えるという文脈で捉えられることが多い。また、家庭教育においても、親が子どもに躰をしたり、子どもの成長を支えたりという見方が強い。それは、教師（親）という大人が、子どもたちに〈ひと〉として生きること、自らの内に「意味」を見出すことを求めているとも言える。しかし、そのような「大人から子どもへ」という捉え方には、「子どもから大人へ」という、子どもから教師（親）への影響について考える視点が抜けている。

子どもたちのもつ「傷つきやすさ」が、本来私たちのもつ感受性を呼び起こすのであれば、大人は教えると同時に子どもたちによって受け入れられ、ケアされているとも言えるだろう。私たちの自覚の有無にかかわらず、子どもたちは私たちが教師であること、親であること、大人であることを支えながら、私たちの生にゆたかさを与えてくれている。子どもたちは「意味」の世界以前の地平において、大人に出会っている。大人は、子どもたちからの感受性の地平への誘い、ケアによって、自らもまた（目の前の子どもたちをはじめ）誰かをケアする存在としてあることを支えられている。

私たちが子どもの立つ「他者に出会う」地平に立てたとき、（キナコがそうであったように）大人も初めて、そして本当に、子どもという「他者に出会う」ことができるのではないだろうか。そしてもし、私たちがそのようなことに対して、意識的になるのであれば、学校（家庭）は、子どもと教師（親）にとって、よりゆたかな、生の喜びに満ちた場所となるのではないか。教育という営みもまた、よりゆたかで多義的な学び多いものとなるのではないか。私たちは今そう考えている。

#### 注

1. ここ数年私たちは、子どものもつ「感受性」や「ケア」に視点をあて、研究と論文の執筆を重ねてきた。その記録として、(青柳,2018; 青柳,2020; 青柳,2022; 大関・青柳,2020a; 大関・青柳,2020b; 大関・青柳,2021; 大関・青柳,2022a; 大関・青柳,2022b)も参照いただければ幸いである。
2. 青柳は、エマニュエル・レヴィナスの思想を取り上げ、その視界から「生と死の教育」についての問い直しや、ケアの倫理をさぐるところみを続けている。そのような視点からも（青柳,2018; 青柳,2020; 青柳,2022; 青柳,2023）を是非、参照いただきたい。

## 参考文献

- 青柳宏(2018). 「生と死の教育」を問いなおす:宮沢賢治とエマニュエル・レヴィナスの視界から. (『宇都宮大学教育学部研究紀要』第68号 第1部)
- 青柳宏(2020). ケアの倫理をもとめて:S.カヴェルとE.レヴィナスの思想を比較しながら. (『宇都宮大学教育学部研究紀要』第70号 第1部)
- 青柳宏(2022). ケアの倫理をもとめて(その二):川上未映子『夏物語』を、エマニュエル・レヴィナスの視界から読む. (『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第72号 第1部)
- 青柳宏(2023). ケアの倫理をもとめて(その三):西田幾多郎とE.レヴィナスの思想を比較しながら. (『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第73号 第1部)
- ハイデガー, M(2013). (熊野純彦訳)存在と時間(全四冊). 岩波文庫[原著初版 1927年]
- 石川憲彦・内田良子・山下英三郎(1993). 子どもたちが語る登校拒否——402人のメッセージ. 世織書房
- 神谷美恵子(2004). 神谷美恵子コレクション 生きがいについて. みすず書房
- レヴィナス, E(1999). (合田正人訳)存在の彼方へ. 講談社学術文庫[原著初版 1974年]
- 町田そのこ(2020). 52ヘルツのクジラたち. 中央公論新社
- 岡真史(1985). 〈新編〉ぼくは12歳. 筑摩書房
- 大関健一・青柳宏(2020a). 「他者の死」と共に生きる「生と死の教育」:宮沢賢治の「春と修羅」「銀河鉄道の夜」をめぐる. (『宇都宮大学教育学部研究紀要』第70号)
- 大関健一・青柳宏(2020b). 他者の生命にふれる「生と死の教育」:矢沢幸との対話を通して. (『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』第7号)
- 大関健一・青柳宏(2021). 宮沢賢治の「永訣の朝」をめぐる授業:賢治とトシとの対話を通して. (『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』第8号)
- 大関健一・青柳宏(2022a). 臨床の地平からみた人間形成:矢沢幸の足跡を辿って. (『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第72号 第1部)
- 大関健一・青柳宏(2022b). 生の感受へ:東田直樹の詩・散文をめぐる授業. (『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』第9号)
- 高井ゆと里(2022). ハイデガー 世界内存在を生きる. 講談社

令和4年10月3日受理





To the horizon of care that "meets others"  
—About Sonoko Machida's "52 Hertz no kujiratachi"—

OZEKI Kenichi, AOYAGI Hiroshi